沖縄空手と福建鶴拳について

盧　　姜威

はじめに

沖縄（琉球）と中国との関係について、多くの歴史研究者が指摘してきたように、1372（明洪武５）年から、1879年の「琉球処分」までの500余年にわたり、朝貢関係が続けられていた。この長い間、沖縄の文化・慣習など多方面にわたって中国の影響を受けたのである。中でも特に一番深い影響を受けたのが福建である。

その理由の一つとして、「閩人三十六姓」の移住[1]が挙げられる。この福建出身の「職能集団」の移住によって、彼らのもつ福建文化・慣習などは、ごく自然に沖縄に持ち込まれたのである。「閩人三十六姓」によって沖縄に持ち込まれた「清明」などの文化は、今でも沖縄で広く継承されている。

そして、もう一つの理由は、沖縄と中国との朝貢貿易の窓口が、福建（泉州の「懐遠駅」と福州の「柔遠駅」）に設けられていたことである。そのため、中国からの冊封使節の一団はほとんど現地の福建人で構成されていた。また、沖縄からの進貢使節の一団は、福建に着いてから、北京に上るごく一部の進貢使節要員を除いたほとんどの人たちは、福建に留まっていたのである。これらの人たちの往来は、文化の交流及び文化の伝播に一役を買ったことと思われる。

沖縄と中国との文化交流などについて、双方の研究者の努力によって、その概要は徐々に明らかにされてきている。一方、中国武術は、他の文化と同様、沖縄空手に影響を与えたと考えられるが、残念なことに、武術の面において、双方の学術的な研究は今のところあまり見られない。

その理由について、筆者は拙稿「ブサーガナシーについて」[2]において、すでに次のようなことを指摘している。

まず、沖縄においても、中国においても、空手（武術）は「口伝」などで教えるのが基本であったので、そのためか他の分野と比べると残されている資料

が少ない。

次に、空手（武術）家の学者・空手（武術）を専門とする学者は比較的に少ない、そのため空手（武術）についての研究が行われる機会も少なくなる。

そして、もう一つの理由として考えられるのは、特殊的な言語の問題である。ここでいう特殊的な言語の問題というのは、単なる日本語と中国語の問題を指すのではなく、沖縄方言と福建方言の問題を指すのである。沖縄空手の伝統的な用語は基本的に沖縄方言で表しているが、型の名称の〈sai fa〉(サイファー)・〈ku run fa〉（クールンファー)・〈ho fa〉（ホーファー)・〈pa sai〉（パッサイ)・〈ne pai〉（ネーパイ)・〈su pa rin pe〉（スーパーリンペー)、それぞれは福建の方言の〈sai hua〉（獅法)・〈kun lun hua〉（滚龍法)・〈hou hua〉（鶴法)・〈pa sai〉（拍獅)・〈nei pai〉（二八)・〈so ba lin pai〉（壹百零八）から由来していると思われる。また、沖縄古武術の武具〈nun tya ku〉（ヌンチャク)・〈tin be〉（ティンベー）は、福建方言の〈luon tsai koun〉（两節棍)・〈tin pe〉（藤牌）から由来していると思われる。

沖縄空手の型名称や武具の名称の例からみても、沖縄空手と福建武術の関連性が非常に高いことがうかがえる。また、沖縄空手に福建南拳の「獅」「龍」「鶴」の拳法が伝わっていることもうかがえる。一方、近代に入って、沖縄空手の礼儀・作法・制度などは日本武道の影響を強く受けてきたようで、それ故、現在は外見だけで沖縄空手と福建武術の関連性を見つけ出すのが難しくなっている。

では、沖縄空手と福建武術は具体的にどのような関連性があるのか。これを明らかにするためには、双方の研究者が空手（武術）の歴史と文化をきちんと整理した上で、各流派の型（套路）名称、技法などについて分析・比較していく総合的な作業が必要になってくると思われる。

本稿では、上記の沖縄空手と福建武術の具体的な関連性を究明するための切り口として、沖縄空手に色濃く残っていると思われる福建鶴拳を取り上げ、両者の関連性を探ってみたい。

１．沖縄空手と福建鶴拳

沖縄空手には中国武術、特に福建鶴拳の影響が及んでいると思われるが、そもそも福建鶴拳とは何か、また沖縄空手はどのようにして発展してきたのか。

ここでは、一度福建鶴拳、沖縄空手の由来についてあらかじめ述べておく必要がある。

（1）福建鶴拳

福建鶴拳は、鶴拳、鶴法、白鶴拳、永春拳、永春白鶴拳ともいわれている。福建の福州、永春、福清、長楽、莆田などでよく行なわれている拳法である。精を練じて気と化することを最大の目的としている。鶴拳は文字通り鶴の動きを取り入れて編み出された拳法である。短橋狭馬（橋は腕の使い方を示し、馬は歩形を表す。即ち狭い歩幅で立ち、腕を短く使うことが特徴である）の中国南派拳術の特徴を持ち、地味な動き、簡素素朴な技であるが、実用技法のみを追求し集大成された拳法であるとされている。南少林拳法では、一は達尊、二は太祖、三は行者（猿拳）、四は羅漢、五は白鶴であるといわれるように、鶴拳はもっとも新しい拳種である。とはいえ、鶴拳は約300年の歴史があるとされている。『永春縣志』[3]の24巻の「方技傳」では、「康熙年間、方七娘與其夫曾四以罪謫永春、住在永春西門外後廟辜厝、在那裡廣授生徒、後人稱為曾武館、鶴法就此在永春發揚光大、蓬勃發展。」（訳：康熙年間〈1662 ～ 1722年〉、方七娘と夫の曾四は、罪で福建省永春県にながされてきて、西門外の後廟の辜厝に居住し、拳法の指導を始めたのである。後にそこは曾武館と呼ばれた。ここに鶴法〈白鶴拳〉は永春で発展し始めた）と記している。ここでわかることは、康熙年間に白鶴拳はすでに成立したことである。しかし、具体的に白鶴拳はいつ、どのようにして成立したかについては、次のいくつかの説からしかうかがうことができないのである。

説一:方七娘の父親、方慧石は反清復明の少林拳士で、清の官兵に追われて、福州沙蓮寺に隠れていた。その頃に、方七娘に少林拳術を教えた。ある日、方七娘が近くの山川で洗濯して帰ってきて、洗濯物を乾すために竿に掛けようとした所、寺の屋根の上に大きな白い鶴が飛んできた。七娘は洗濯物が汚されるのを心配して、竹竿を持って、鶴を追い払った。鶴の頭を撃とうとすると、鶴は体をかわし、翼を張ってこれを防ぐ。翼を撃とうとすると、上に飛び上がってこれをよけ、足の爪で竹竿を撃ちたたいて反撃する。体を撃とうとすると、翼を微かに動かして退いてこれをよけ、くちばしで竹竿をついて反撃する。七

娘は鶴の動きをしっかりと覚えて、日々研鑽し、鶴の動きと己の少林十八羅漢手をあわせて考えて、白鶴拳を編み出した。[4]

説二：方七娘の父親、方掌光は、浙江処州府麗水県の人である。富家に生まれ、義侠心が強く、武術を好んで、天下の豪傑と交わりを持っていた。ある日、ある老人が方掌光の所へたずねて来て武術について語っていた。方掌光は自信満々に得意の技をその老人の前で披露したが、老人は「精妙な域に達したものではない」と厳しく言った。方掌光は納得がいかず、老人と一試しすることになった。しかし、方掌光は老人に遠く及ばず、老人に触れることもなく敗れてしまった。そこで、方掌光は己の至らなさを悟り、老人を師として迎えた。老人は夜になると教えにやってきて、夜明けには帰っていく。しかし、方家の門は閉じたままで、老人が出入りする気配はなかった。これを不思議に思った方掌光は、ある朝老人の帰りをこっそりと覗いてみると、老人は庭で大きな白い鶴となって空へ飛んでいった。老人が白鶴仙であることを知った方掌光は、老人から教わった拳法を「白鶴拳」と名づけて、一人娘の七娘に伝授した。[5]

説三:方七娘の父親、方種は、財産家で、義侠心が強く、少林拳術を好んで、天下の豪傑と交わりを持っていた。方種は早くに妻を亡くし、一人娘の七娘と二人で暮らしていた。七娘は拳術を好んで、父親から少林拳術を習っていた。16才になった七娘は、婚姻の約束相手陳対犀に逃げられ、貞節を守るため白蓮寺に身を寄せた。ある日、方七娘が布を織っていたとき、寺の境内を一羽の白鶴が飛び回っていた。七娘は不思議に思い、手元の箱を鶴に投げつけたが、鶴は体をかわし、全然当たらなかった。次に七娘は棒を持って、白鶴に攻撃を仕掛けたが、鶴は翼で弾き返したり、身を退いたりして、一度も打撃を受けることはなかった。七娘は鶴の動きをしっかりと覚えて、日々研鑽し、鶴の動きと己の少林拳術をあわせて考えて、白鶴拳を編み出した。[6]

説四：方七娘の父親、方種は、福寧府北関外の人である。ある日、近隣の悪人たちに欺かれ、殴られて死んでしまった。親孝行の七娘は父親の仇を討つことを決意したが、か弱い女の身であるため、どうすることもできなかった。ある日、父親の死を悲しみ部屋で泣いている時、屋外で二羽の白鶴が翼ではたいたり、体を交わしたり、左右をさえぎり阻んだりして雄を争っていた。不思議に思った七娘は、竹竿を持って鶴を撃ってみたが、白鶴は進んだり退いたり、

浮いたり沈んだりして身を遮り覆い隠し、いささかも傷つくことがなかった。七娘は白鶴にも絶妙な霊性があることを悟り、二羽の白鶴の飛び舞い戦う姿勢を真似して、練習を積み重ねて、三年にして白鶴拳を編み出した。（沖縄に伝わる空手の秘伝書とされる『沖縄伝武備志』、図１参照）

図１「比嘉世幸本」『沖縄伝武備志』（「遊鶴拳論」）

いずれの説にも、白鶴拳は、方七娘によって鶴の翼のはばたきなど鶴の動きを参考にして編み出された拳法であるという同一性が見られる。白鶴拳はどのようにして発展したのか。ここでは、白鶴拳の発展についてみてみたい。

前述の『永春縣志』24巻の「方技傳」の記載（康熙年間〈1662 ～ 1722年〉、方七娘と夫の曾四は、罪で福建省永春県にながされてきて、西門外の後廟の辜厝に居住し、拳法の指導を始めたのである。後にそこは曾武館と呼ばれた。ここに鶴法〈白鶴拳〉は永春で発展し始めた）と、『沖縄伝武備志』の「曽四叔学得十分拳法、後帰永春傳授諸家」（曽四叔は拳法を十分に学得し、後に永春に帰り、諸家に伝授す）とを総合的に考えると、白鶴拳は方七娘と夫の曾四によって、永春から広められたことであると思われる。

方七娘と夫の曾四は、永春西門外の後廟の辜厝で、林、蔡、楽、鄭、姚、辜、王、李など多くの門弟に白鶴拳を伝授した。『永春縣志』24巻には、「鄭礼、和風里之大羽人、善拳術。康熙間、有…鄭礼与林椎、姚虎等二十四人事焉。七娘感其意、悉其術授之…」（訳：鄭礼は和風里の大羽〈現在の天馬山の大羽村〉の人で、拳術を好む。康熙年間、七娘は鄭礼と林椎、姚虎など24人の誠意に感心して、拳術を伝授した）と記してある。これによると、方七娘と夫の曾四は初め、鄭礼と林椎、姚虎など24人の門弟に白鶴拳を伝授したことがわかる。後に門弟はさらに増え、白鶴拳は発展の第一歩を踏みだした。曾四のすぐれた５人の高弟である鄭礼、辜喜、辜魁、楽傑、王打興を「五虎」と呼んでいる。また、「白鶴門の二十八英俊では、楽傑が第一、王打興が第二である」とよく伝えられているが、おそらくこの「二十八英俊」は曾四の多くの弟子の中から、28名の英

俊な弟子を選んでそう名づけたのであろう。

現在、福建地方では、白鶴拳から発展してきた「宗鶴拳」、「食鶴拳」、「鳴鶴拳」、「飛鶴拳」の４大拳種が伝えられている。筆者の故郷長楽でも、福清の呉先生より「飛鶴拳」、劉先生（出身不明）より「鳴鶴拳」と思われる拳法が伝えられている。その「飛鶴拳」と「鳴鶴拳」の基本型は共に「三戦」である。「飛鶴拳」の「三戦」は上地流系・剛柔流系の「三戦」の立ち方とほぼ同じであるが、腰はもっと落としている。呼吸法は基本的に鼻で行なっていて、上地流系の「スッ」、剛柔流系の「ハー」のような息を吐く時に出す音がない。「鳴鶴拳」の「三戦」は小林流系の「ナイハンチ」の立ち方と似ているが、呼吸法は剛柔流系のものと同様に、息を吐く時に力強く「ハー」という音を出す。なお、「鳴鶴拳」の「三戦」の続きに「四門」という型があり、「三戦」と「四門」を繋げた型はまたの名を「八歩連」という。この「八歩連」という型の名称は、沖縄空手の秘伝書とされている『沖縄伝武備志』の中にも出てくるものである。

（２）沖縄空手の概説

沖縄の空手の由来・発祥については、まだはっきりとした定説がない。『沖縄県史』[7]の「古武術」では、沖縄の空手について次のように述べている。

> 古くは沖縄に自然発生的に存在した武術がしだいに発達して沖縄固有の武術「ティー」になり、それに加えて中国から伝来した拳法と、東南アジアあたりから伝わった武術なども加味されつつ体系化されて、今日みる空手にまで発展してきたとみられる。この空手の母体はあくまでも「ティー」であり、それが沖縄という地理的に特殊な環境によって、独特に発展してきた武術である。[8]

つまり現在の沖縄空手は、古くから沖縄に自然発生的に存在した武術「ティー」をもとに中国などから伝来した拳法を参考にして、独特に発展してきた武術であることを言っている。しかし空手に関する文献史料が乏しいため、なぜ「ティー」と呼んだのか、また昔の琉球に、体系化された武術としての「ティー」が存在したかどうか自体も疑問である。ここではそういうことも視野に入れながら、沖縄空手の由来について考えてみることにする。

空手のルーツを語るには、よく1392年に渡琉した「閩人三十六姓」のことが

挙げられている。この「閩人三十六姓」は那覇の久米に「唐栄」という集落を作って住みはじめた。当時の沖縄は三山分立の時代であった。異国の地にきた「閩人三十六姓」は集落の防備や自己防衛のため、何らかの武術を身に修めていたのであろうとされている。このことと、「琉球の唐手術は、中山王の時代に渡来した福建三十六姓の人たちが浮島に持ち込んできたもので、明治維新前までは、久米村に住む人達の特技だった」[9]という明治頃の琉球士族の間の口承が、空手の出発点を「閩人三十六姓」の来琉したときに始まるとする原因の一つであろう。しかし、「閩人三十六姓」による武術の伝来についての確かな文献史料はどこにも見当たらない。仮に「閩人三十六姓」によって武術が琉球に伝わってきたとしても、どういう形の武術であるか、武器を用いる武術なのか、それとも徒手空拳の武術なのかなどについては一切知られていない。また、今日に伝わる空手の「型」を見れば分かるように、「閩人三十六姓」の渡琉時代から伝わってきたものと思われる「型」は見当たらない。

空手に関する初めの文献と思われるものは『大島筆記』[10]である。この『大島筆記』は、1762年、琉球船が薩摩に向かう途中暴風にあい、四国の土佐藩の柏島の大島浦に漂着したのを、土佐藩の儒者戸部良凞が琉球使者の潮平親雲上らに尋問してまとめたものである。上、下、付録の３巻からなる。下巻には次のような記述がある。「一　先年組合術（良凞謂、武備志載する所の拳法ときこゆ）の上手とて、本唐より公相君（是は稱美の號なる由なり）弟子を数々つれ渡れり。其わざ左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわざをし、扨足をよくきかする術也。甚痩く弱々としたる人でありしが、大力の者無理に取付たを、其儘倒したる事など有しなり」[11]とある。この一文からすると、当時の沖縄に、武器を使わない徒手空拳の武術がすでに伝わっていたことがわかる。しかも、当時の琉球人がこの徒手空拳の武術を「組合術」と称していたかもしれない。しかし、空手の前身とされている「ティー」あるいは「トーティー」という言葉の存在を、この文献からうかがうことはできない。

「ティー」あるいは「トーティー」という呼称はいつ頃から呼ばれるようになったのか、確かなことはまだわかっていない。

首里赤田村出身の佐久川親雲上寛賀（1782 ～ 1837年）の活躍時代に、人々は彼のことを「唐手（トーティー）佐久川」と称していた。[12]そして「ティー」

については、「唐手佐久川」の冠称「トーティー」から、琉球在来の武術としての「ティー」を仮定した説[13]がある。しかし、「唐手佐久川」の用語について、現時点で確認出来ている最古のものは、『琉球新報』の大正4（1915）年3月20日付の中座の「琉球古事　隠れ武士(但シ、フー切仲間唐手佐久川武勇伝)」の上演広告である。

ところが、次のことから、1867年頃に「唐手」という呼称はすでに使われていたことがわかる。①尚家文書「組躍」〈同治六年（1867年）卯九月〉（那覇市歴史博物館所蔵）の「二山和睦」に、「鎌手唐手／鑓長刀不足なく武藝の数〃御嗜の／御様子」という文が記されている（なお、『日本庶民文化史料集成第十一巻南島芸能』[14]の「二山和睦」には「鑓長刀鎌手／とう手不足ないん／武芸のかす〳〵／御嗜の御様子」となっている。また、同書にある「附此時虎千代唐手虎松鎌手／嶋切手毎」という文は、尚家文書「組躍」に見られない)。②『島袋全発著作集』[15]に、久米村が首里崎山の御茶屋御殿で催した1866年の冊封後の祝賀会（1867年３月24日）のプログラムにあたる「三六九並諸芸番組」が掲げられている。その記述から、「藤牌・鉄尺並棒・十三歩・棒並唐手・ちしやうきん・藤牌並棒・鉄尺・交手・車棒・壱百〇八歩」[16]などの武技が演じられていたことがわかる。(ちなみに、従来では賀表や賀詩など軽いもので済まされているようである[17])。1867年頃に、「唐手」は実際に演武され、しかも「組躍」の台詞にも登場してくることから、「唐手」という呼称はもっと早い時期に使われていたことがうかがえる。

「琉球処分」後、日本の明治政府は、琉球王朝時代からの制度や慣習などを相次いで刷新していき、特に中国文化に対して一層厳しく排斥していた。学校教育においては、「大日本武徳会」が創立された1895年を機に、全面的に「尚武的教育」をおしすすめた。学習に「柔術、撃剣、角力」を奨励すると同時に、「唐手」を「中国の蛮風野俗」とみなし、極力的に排除していた。[18]

明治30（1897）年代半ばまで、「唐手」は社会的に排斥されていたが、なぜ最終的に「学校教育」に取り入れられるようになったのか。この理由として、当時の学校の身体検査、徴兵の身体検査の時、担当者は「唐手」を経験しているものが良い体格をしていることに気付いて、上部にすすめたとされている。[19]

沖縄空手はどのようにして「学校教育」の正課として取り入れられたか、ま

たどのようにして普及発展を成し遂げたかについて、拙稿の「近代沖縄“空手”の普及発展」[20]において述べているので、ここでは、その一部を概略して以下のようにまとめておきたい。

沖縄の学校教育で「普通体操・兵式体操」などの学校体育が実施され、軍事色をおびた教育内容となっていく中で、明治38（1905）年に空手も正課体育として学校教育に導入された。言い換えれば、空手は軍事教育の確立・戦力増強の手段に利用されていたとも言えよう。ただ、学校で行われる空手は従来とは異なり、「体操式」に組立てられて行われていたのである。また、一中（現首里高校）のように大正５（1916）年５月に空手の学課が休課に追い込まれていたなど、学校現場で空手が必ずしも「正規」の位置を得たものではなかったことも知られるのである。

一方、学校教育に導入されることによって、「門外不出」の武術として限られた一部の人達によって行われていた空手は、学校生徒をはじめ、農村の人達にも浸透するようになり、地域の行事・学校の行事の演目としても登場することになった。また、明治42（1909）年頃に新たに奨励すべきものとして、空手が取り上げられるなど、社会的に空手を勧めていたこともうかがえる。さらに、大正年間（1912 ～ 1926年）になると、一般観衆に求められ（「武士道鼓吹」の好宣伝手段としても）、空手の武勇伝を芝居化したり、空手そのものを興行物として舞台で披露するようになった。

大正10（1921）年頃には、民間において空手の大家達による研究活動が活発になっていたと思われる。空手の型の合理性について研究したり、またそのノートを写したりしていたことから、空手の大家達の間に交流活動も盛んであったことがうかがえる。そして、大正14（1925）年５月頃に、宮城長順、摩文仁賢和、大城朝恕、城間真繁、屋比久孟伝、喜屋武朝徳、等「琉球武術」の大家達の発起によって、はっきりした目的・活動内容を持った空手の民間組織「沖縄武道協会」が設立された。「沖縄武道協会」が設立されたあと、首里の「沖縄唐手研究倶楽部」、若狭の「唐手研究倶楽部」、具志川の「唐手の道場」など、沖縄県下に多くの空手道場が現れるようになるなど、空手の民間組織の一番活発な時期を見せていた。

しかし、昭和５(1930)年11月21日に「沖縄県体育協会」の創立に伴って、当時

の「唐手協会」(「唐手倶楽部」)は「沖縄県体育協会」(知事が総裁、学務部長が会長)の「唐手部」として合併され、空手の組織も官製化されていった。さらに、昭和８(1933)年12月26日に、「大日本武徳会」本部の認可を受け、空手は武道として「大日本武徳会」の組織にも取り込まれていった。そして、昭和11(1936)年10月25日に官主導の「沖縄空手道大家の座談会」が催され、翌日の『琉球新報』で大きく取り上げられ、空手の名称は「唐手」から「空手」に統一されることとなった。(なお、『沖縄日報』等はあいかわらず「唐手」を使っていた。)その後、「沖縄県体育協会」の空手部と「武徳会支部」の空手部の背景をなすため、「空手振興協会」の組織の必要性が説かれ、昭和11(1936)年12月に宮城長順・仲宗根源和らによって「沖縄県空手道振興協会」が発足された。

沖縄空手の県外への普及については、大正11(1922)年に富名腰義珍と本部朝基の活躍がもたらす影響は大きかったと思われる。その後、富名腰義珍、本部朝基、宮城長順、摩文仁賢和、上地完文らの普及活動によって、沖縄空手の日本本土への普及は飛躍的に進んでいき、多くの大学において空手部が設置され、空手の出版物が刊行されるなど、空手への関心は高まっていった。そして、その空手熱は、沖縄県立第一中学校の「唐手部」の復活にも影響を及ぼし、空手の映画化にも一役をかい、空手の海外への普及発展にもつながっていくものと思われる。そして、第二次世界大戦後、沖縄空手は駐留米国軍人などによって、国際的に普及発展を遂げてきたとされている。

（３）沖縄空手と福建鶴拳の関連性

これまで、沖縄空手と福建鶴拳について述べてきた。では、両者は具体的にどのような関連性があるのか。次において、沖縄空手の型名称をとりあげ、両者の関連性を探ってみたい。

沖縄空手が世界的規模に発展した今、「世界の空手人口はおよそ5000万人と推定され、国境や言語、宗教、体制、人種の壁を超え、その普及する国々は150カ国に上ると言われている」[21]。沖縄県議会は「沖縄伝統の空手が今後ますます発展し、世界の平和と人々の幸福に貢献することに願いを込めて、『10月25日』を『空手の日』とすること」[22]を決議した。現在沖縄では、上地流、剛柔流、小林流をはじめ、数多くの流派が存在している。各流派に伝わる型は、それぞれ

福建鶴拳とどのような関連性があるのか。流派ごとにみてみたい。

①小林流系:伝わる型はナイハンチ、アーナンクー、ワンカン、ローハイ、ワンシュー、パッサイ、五十四歩（ウーセーシ)、チントウ、クーサンクー、白鶴（ホーファー)、ジオン、二十四歩（ニーセーシー)、ルーファー、サンチン、セーサンなどである。これらの型の伝承について、はっきりとしたことはまだわかっていない。「クーサンクー」については、前述した『大島筆記』に登場する中国より渡琉した「公相君」が直接伝えたかどうかまだ検討の余地はあるが、「公相君」の影響を受けていたことは否めないであろう。一方、「公相君」なる人物はどの拳の使い手であったか、現時点ではまだはっきりとわかっていない。「パッサイ」については、拙稿「沖縄空手の型名称についての一考察」[23]において、福建の「拍獅」(獅子舞)から由来していて、福建獅拳の特徴があることを指摘している。「ナイハンチ」は、小林流系の基本型となっているが、その由来についてまだはっきりとわかっていない。一方、明治29（1896）年４月の『琉球教育』第４号の「本県の拳骨を弄するは他府県に於ける撃剣槍術なり一名唐手と称す其技術の目に於ては『パッサイ』『クウサンクン』『ナンハンチン』等の名ありて」という記述から、「パッサイ」「クーサンクー」「ナイハンチ」は当時から既に代表的な型となっていたことがわかる。「サンチン」「セイサン」について、明治41（1908）年２月10日付の『琉球新報』に、その名が確認される。しかし、これらの型と福建鶴拳と関連性があるかどうか、現時点でわかっていない。ただ、白鶴（ホーファー）について、発音の「ホーファー」(ho fa)は、福建方言の「鶴法」(ho fa)の発音と同じで、また動作は鶴の動きにもみえる(具体的な考察は稿を改めて行いたい)ため、福建鶴拳と関連性があると思われる。

②剛柔流系:伝わる型は、三戦（サンチン)、サイファー、シソーチン、十三歩（セーサン)、十八歩（セーパイ)、二十八歩（ネーパイ)、三十六歩（サンセールー)、クルルンファー、セーエンチン、壱百〇八歩（スーパーリンペー)などである。このうち、福建鶴拳と明確な関係があるのは、二十八歩（ネーパイ）のみである。なぜなら、二十八歩（ネーパイ）は発音と動作の両面からみて、福建の鳴鶴拳の「二十八」(ne pai)と非常に似ているからである。十三歩、シソーチン、壱百零八歩という型は、前述の1867年３月24日の冊封後の祝賀会で

披露されていたと思われるが、どの拳種であるかは、まだわかっていない。因みに、剛柔流の開祖宮城長順の師・東恩納寛量が福建で師事した拳師は、謝崇祥、鄭礼、魯六哥であると、沖縄で異なった説が説かれているが、最近福建永春の白鶴拳史館では、林世城(詰若)であると新たな説を掲げている。

③上地流系:直伝の型は、三戦(サンチン)、十三(セーサン)、三十六(サンセーリュー)である。この三つの型は、開祖上地完文が直接福州の「シュウサブ」より学んで沖縄に持ち帰ったのである。この三つの型は、具体的にどういう拳術であるか。これを解明するため、1965年に上地流の幹部は台湾で調査し、「龍虎鶴」拳であると結論付けた。その後、福州の武術協会に調査を依頼し、出した結論は周子和の虎拳であった。この他、周子和の亜流の鶴拳、永泰虎拳師の虎拳などの説が説かれている。しかし、これらについては、まだ改めて検討しないといけないようである。ただ、福建鶴拳との関係について、上地流に「鶴嘴拳」などの技法があるため、関連性があると考えられる。また、上地流はもともと「パンガキヌーン流」と名乗っていて、意味について、「拳法の型が非常に速いと云う意味」とされる[24]。一方、この「パンガキヌーン」は福建方言で「半硬軟」となるが、「宮城長順氏之談[25]」において、「イ、硬法―獅子の法、虎の法」「ロ、柔法―犬の法、猿の法」「ハ、半硬法―鶴の法」と半硬法に鶴の法が充てられていることからみると、「パンガキヌーン」(半硬軟)と名乗っていた上地流空手は鶴拳の特徴を有していると考えられる。因みに、流派名の変遷について、上地完文が大正15(1926)年3月に開設した道場名は「パンガキヌーン唐手術研究所」であったが、昭和9(1934)年までには「パンガキヌーン流空手術研究所／教師　上地完文」となり、昭和15(1940)年の秋に「上地流空手術研究所」に改めたとされている[26](なお、1934年12月に空手研究社興武館より出版の空手研究社の『空手研究　第一輯』には「パンガキヌウン流／唐手教授／教師　上地寛文」とある)。

④劉衛流:アーナン、オーハン、ヘイクー、パイクー、パイホー・白鶴(ハッカク)などの型が伝わっている。劉衛流は、仲井間憲里が1800年代前半に中国より持ち帰ったものを、「一子相伝」で子の憲忠、孫の憲孝へと伝承した。そして、1970年に憲孝がはじめて門戸を世に開いた[27]。劉衛流の型は、まだ不明なものも多いが、明らかに福建鶴拳と関連しているのは、「パイホー」と「白鶴(ハッ

カク)」の二つである。「パイホー」は仲井間家に秘伝されたものであるに対して、「白鶴（ハッカク)」は呉賢貴（大正・昭和初期まで沖縄で活躍した福州出身の鶴拳大家）が伝えたもので、「パイホー」との動作の違いについて、「鶴翼の開き方が劉衛流とは逆で・・・劉衛流は内から開くが呉のそれは外から閉めてくる[28]」とされている。また、「パイホー」は福建方言の「白鶴」(pai ho）であると思われる。

⑤金硬流：図２のように多くの型が伝えられている。宗家又吉靖の話しによると、金硬流のものは、又吉家家伝のものを基に、祖父真光が清末（1910年頃）に中国福建に渡って金硬老師から福建少林拳を学んで沖縄に持ち帰り、さらに父真豊が昭和（1926 ～ 1989）初期に呉賢貴から鶴拳を学んだものを加えた形となっている。金硬流の型について、詳しい分析まだ行っていないが、型名称からみても、「金硬流唐手術」の「虎鶴」、「南派少林派鶴拳」の「鶴立法」「鶴法」「八歩連」「二十八」「練鶴」「遊鶴」、「白鶴兵法」の「初段」「二段」「三段」、及び「飛鶴長拳」など、福建鶴拳と関連性があるとみられる。

図２　金硬流唐手又吉古武道光道館の「形目録」

現在沖縄に空手の型が数多く伝えられているが、その中の型名称の由来についてはいまだに究明されていないものが多い。一方、以上取り上げた五つの流派の例を見ると、沖縄空手と福建鶴拳とは何らかの形で関連していることが言えるのである。このほか、旧久米村の蔡氏一族に伝わっていた「湖城流」空手は、現在沖縄で失伝とされているが、日本本土に渡った「湖城流」に、「白鶴」という型が伝わっている。

おわりに

以上、沖縄空手と福建鶴拳についてみてきた。残されている史資料は多くないため、双方の歴史について不明な点も多々あるが、次のように概略することができよう。

まず、福建鶴拳について、創始者方七娘にまとう伝説はいくつもあるが、い

ずれの説にも鶴の翼の羽ばたきなど鶴の動きを参考に編み出された拳法である点においては一致している。しかし、伝承については、方七娘（１代目）から曽四（２代目)、そして３代目の鄭・辜・楽・王などの伝承者の名前は、前述の『永春縣志』で確認できるが、具体的な拳術・拳譜の伝承については不明である。現在鶴拳の種類は「飛鶴拳」「鳴鶴拳」「宿鶴拳」「食鶴拳」などとあるが、具体的にどのようにして発展してきたのか、不明なところまだ多々あるのである。また確認されている「伝書」についても、５代目伝承者以降のものが殆どである。ところが､沖縄の空手の秘伝書とされる『沖縄伝武備志』(遊鶴拳論)は、「白鶴拳」から派生した「飛鶴拳」「闘鶴拳」「遊鶴拳」の中の「遊鶴拳」について語ったもので、年代的に言うと、３代目の王のもので、中国福建に伝わるものより２代も古いのである。この『沖縄伝武備志』（遊鶴拳論）は、空手家の間で秘蔵されていたもので、1930年代前には沖縄の空手家の間でしか伝わっていなかったが、1930年代を境目に日本本土、そして海外へと広まっていったのである[29]。

一方、沖縄空手について、「琉球処分」前は、伝承の過程は殆ど不明である。1762年の『大島筆記』の記述から、中国渡来の「公相君」が影響を与えたことは否めないのであるが、具体的にどのような拳術であったかについては、まだわかっていない。そして、1867年には、尚家文書に「唐手」「鎌手」などの記述がみられ､また「寅の御冠船」あとの祝賀会のプログラムから､「十三歩」「ちしやうきん」「壱百〇八歩」などの型はすでに行われていたことが分かる。「琉球処分」後、「唐手」は一時期、「遊戯・鼓鑼打・綱引」などと同じように、中国の蛮風野俗と見なされ、教育上において疎外されていた。しかし、明治30年代半ば、空手は健康上（軍人養成上）裨益あることが認められ、明治37年に１年間かけて研究の末、明治38年から、大人数でも指導できるように体操式に組み立てられ、学校教育の現場で正式に教えるようになった。そして、明治年代後半・大正年間になると、「武術鼓吹」の流行に、「唐手」を題材とする劇、空手の商業演出などが登場するようになった。大正10年頃、空手家達の研究交流も盛んになり、大正14年５月に、宮城長順・摩文仁賢和・喜屋武朝徳などをはじめ、「研究員を唐手の本場南清」へ発遣するなどの目的を掲げ、はじめて空手の民間組織「沖縄武道協会」を立ち上げた。ところで､昭和５年に官製の「沖

縄県体育協会」の創立に伴い、「沖縄武道協会」はその「唐手部」として合併された。さらに、昭和８年に、空手は「大日本武徳会」本部の認可を受け、正式に日本武道「唐手道」として登場するようになった。そして、昭和11年10月25日に「唐手の座談会」が催され、空手の名称を統一する運びとなった。

沖縄空手の県外への普及については、大正11年に富名腰義珍と本部朝基の活躍が齎した影響が大きかったようである。その後、富名腰義珍、本部朝基、上地完文、宮城長順、摩文仁賢和らの普及活動によって、日本本土ないし世界への沖縄空手の普及は飛躍的に進んでいった。

では、沖縄空手と福建鶴拳について、具体的にどのような関わりを持っているのか。前述の通り、沖縄空手の各流派に、鶴拳の面影がみられるのであるが、具体的にどのようにして伝わったのか、また技法上において、どのような差異があるのかについては、これからの研究を俟たなければならないのである。

また、沖縄の空手の秘伝書とされる『沖縄伝武備志』（遊鶴拳論）の伝承からみても、福建鶴拳が沖縄空手に齎した影響は大きかったとうかがえるのである。ちなみに、明治・大正年間に空手の流儀は、「昭林寺流」と「昭霊寺流」に分けられていたが、この「昭林寺」と「昭霊寺」の言葉の出所は、『沖縄伝武備志』（遊鶴拳論）である。なぜ､『沖縄伝武備志』（遊鶴拳論）に出ている「昭林寺」と「昭霊寺」が、空手の流儀名となったのか、もしこの問題を解決できたら、福建鶴拳と沖縄空手の関連性はより一層明らかになるのであろう。

《謝辞》

波照間永吉教授の御退官にあたって、恐縮ながらこの小論を謹んで記念に添えたいと思います。波照間永吉教授の研究室の“巣立て”から、早くも４年が経ちました。今でも振り返るたびに思うのは、波照間永吉教授と出会っていなければ、僕は研究の道に進むことは決してありませんでした。また、波照間永吉教授の献身的な指導と温かい見守りがなければ、僕はきっと途中で挫折し、「学位論文」も決して完成しませんでした。ここで、改めて、「波照間シンシー、イッペーニヘーデービル」！

なお、本論文は、沖縄県立芸術大学大学院に提出した博士学位論文「『沖縄伝武備志』の研究―沖縄空手との関わりを中心に―」（2011年3月）の一部を抽出して、最新の調査で得た情報を加えて、新たに組み立てたものであります。調査等で協力していただいた関係者に、心よりお礼を申し上げます。

本研究は、中国国家社会科学基金（課題番号15BTY089）の助成を受けたものです。

注

１．球陽研究会編 1974年３月『球陽』角川書店 巻１の46参照
２．盧姜威 2014年３月 「ブサーガナシーについて」(『沖縄芸術の科学』26号所収) 沖縄県立芸術大学附属研究所
３．鄭翹松等纂 2000年 『永春縣志』 上海書店出版社。なお、永春県政府県志編撰弁公室では、李俊成出資の木版印刷の『永春縣志』を所蔵している。
４．劉故・蘇昱彰 1981年１月『白鶴門食鶴拳』華聯出版社 参照
５．李載鶯 1986年７月『福建鶴拳秘要』華聯出版社 参照
６．金城昭夫 1999年７月『空手伝真録』沖縄図書センター 参照
７．沖縄県教育委員会編 1975年２月『沖縄県史』第５巻 沖縄県教育委員会
８．沖縄県教育委員会編 1975年２月『沖縄県史』第５巻 沖縄県教育委員会 p 551
９．儀間真謹・藤原稜三 1986年10月 『対談 近代空手道の歴史を語る』ベースボールマガジン社 p４
10．宮本常一他編 1968年７月『日本庶民生活史料集成』第１巻 三一書房
11．宮本常一他編 1968年７月『日本庶民生活史料集成』第１巻 三一書房 p367
12．沖縄県教育委員会編 1975年２月『沖縄県史』第5巻 沖縄県教育委員会 p 550。なお、佐久川寛賀の生没年について1782 ～ 1867年、他諸説あり。
13．沖縄大百科事典刊行事務局編 1983年４月 『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社 p 770
14．芸能史研究会編 1975年３月 『日本庶民文化史料集成 第十一巻南島芸能』 三一書房
15．島袋全発遺稿刊行会編 1956年11月『島袋全発著作集』おきなわ社
16．島袋全発遺稿刊行会編 1956年11月『島袋全発著作集』おきなわ社 pp300-306参照
17．「冠船の前例通り賀表や賀詩のみで済しては事軽く」(島袋全発遺稿刊行会編 1956年11月『島袋全発著作集』おきなわ社 p298)
18．盧姜威 2013年７月 「明治期の沖縄“空手”の事象―学校教育に導入前の事例を通して―」 沖縄文化協会2013年度公開研究発表会
19．富名腰義珍 1922年11月 『琉球拳法唐手』 武侠社。1935年12月10日付『琉球新報』を参照。
20．盧姜威 2011年３月 「近代沖縄“空手”の普及発展」(『沖縄芸術の科学』23号所収) 沖縄県立芸術大学附属研究所
21．沖縄県議会 2005年３月29日「空手の日宣言に関する決議」
22．沖縄県議会 2005年３月29日「空手の日宣言に関する決議」
23．盧姜威 2015年３月 「沖縄空手の型名称についての一考察」(『琉球空手のルーツを探る事業調査報告書』所収) 浦添市教育委員会
24．空手研究社 1934年12月『空手研究 第一輯』空手研究社興武館 p93
25．三木二三郎・陸奥瑞穂 1930年１月『拳法概説』東京帝国大学唐手研究会 参照
26．上地完英監修 1977年11月『精説沖縄空手道―その歴史と技法』上地流空手道協会 p306・357 参照
27．高宮城繁等編著 2008年８月『沖縄空手古武道事典』柏書房 参照
28．高宮城繁等編著 2008年８月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p191

29. 盧姜威 2011年11月「『沖縄伝武備志』の研究―諸本の系統関係について―」(『沖縄文化』110号所収) 沖縄文化協会 p64・65参照